

Sky Seminar



まちづくりへの取り組みのクロスボーダー化

「焼きの屋台の横で生春巻きやタコ焼きといった各国の料理が並び、メニューではよきよきとにも中国獅子舞やサンバなどが練り上げられる。近年、日本の地域のお祭りで見かける光景である。

世界的規模での国境を越えた人の移動、クロスボーダー化の波は日本にも確実に到来している。05年末時点での外国人登録者数は2百万人を突破し、過去最高を記録した。在日コリアンに加え、近年は南米からの日系労働者とその家族、アジア諸国からの留学生、研修生など日本で生活する外国人の数が増えている。

「異文化」を地域社会にもたらす人のク

ロスボーダー化は旧来の秩序や価値観を脅かす存在として意識され、さまざまな衝突や対立を生むことがある。欧州では国内の治安の悪化や失業問題の原因が移民だ」といつ極右政党の主張に同意する若者たちが移民に対する暴力行動に出た。日本でも就職や入居差別、近隣住民間で「ただよび騒音などの摩擦が次第に目立つようになってきた。

しかしクロスボーダー化は均質であるがゆえに硬直化している社会に活力を与え、飛躍的な発展をもたらす可能性を秘めている。冒頭で述べた地域のお祭りはその例だ。もちろんこれは「多文化共生」のため

第歩に過ぎない。お祭りという「非日常」の中での楽しい面白くだけの多文化共生（Food Fashion Festival）に代表される表面的な多文化共生だけでは不十分である。クロスボーダー化が引き起こす課題に正面から向き合い、互いの文化を尊重しあう必要がある。

では多文化共生はどのようにすれば達成できるのか。「これは日本だから、外国人は日本の文化風習に合わせてほしい」といつのは極端にしても、「外国人がきちんと生活できるように、日本語や日本のルールを教えた」り、問題を抱えた外国人には専門の援助を提供すればいい」と考えている人は少なくない。しかしこれではいままでも、日本人と外国人というボーダー（境界）は維持されたまま、「共生」の確立は困難である。

「住民参加のまちづくり」といつ言葉をよく耳にするが、いったいどのくらいの外国人や障害を持った人たちが参加できているのか。共生のためには、社会の中で不利な立場に置かれている人たちも参加できるように、まちづくりのクロスボーダー化が必要だ。そのためにも日本人一人ひとりが、日本人と外国人」といつ二項対立から脱却し、外国人問題としてではなく、自らの地域の課題としてクロスボーダー化と向き合うことが必要である。そうすれば、「自分たちが住みやすいまちづくり」といつ考えが「痛みがともなうけども、誰もが住みやすいまちづくり」といつへと発想の転換ができていくのか。

武田 丈

関西学院大学
社会学部准教授

ただだじょう
ソーシャルワーク専攻、関西学院大学社会学部卒、同大学社会学部修士号、米ミネソタ大学大学院（M.A.）取得、米国の難民支援NGOのソーシャルワーカー、米国やインドの大学研究所研究員などを経て、2000年より現職。主な著書は『ソーシャルワーカーのためのリサーチ・テクニック』（ミネルヴァ書房）、『クロスボーダーからみる共生と福祉』（ミネルヴァ書房）、『フリン女性エンターテイナーのライフストーリー』（関西学院大学出版会）など。08年4月から同年開設の人間福祉学部社会起業学科に移籍予定。



西宮上ヶ原キャンパス
〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1番155号
神学部 文学部 社会学部 法学部 経済学部 商学部 人間福祉学部(2008年4月開設)

神戸三田キャンパス(KSC)
〒669-1337 兵庫県三田市学園2丁目1番地
総合政策学部 理工学部